

地域の方々の手入れにより公民館は花ざかり



今年もきれいに咲きました。



黒沢公民館の桜を、遠くからの人も花見に来られました。



手作りのご馳走に大満足！



はつらつ健康教室の皆さん
笑顔で花見（‘▽’）

三浦兼孝作陶展

5月9日（土）～5月22日（金）まで
石正美術館ギャラリー 【入場無料】
時間9：00～17：00 月曜日は休館日です

★陶芸教室で教えて頂いている先生です。
初めての展示会、とても楽しみです。

◎5月の陶芸教室はお休みです

寄せ植え教室を行います

☆ 5月28日（木）10時から

☆ 参加費：700円

☆ 講師：篠原 恵子先生

☆ 持ってくる物：寄せ植えの出来る鉢

※ 材料準備の為、参加される方は5月21日（火）までに公民館までご連絡ください。

公民館： 電話 35-1509

草木染め教室

☆5月31日（日）

☆午後1時30分～3時まで

☆講師：三澤 清美先生

☆持ってくる物：木綿の白いハンカチ

白のTシャツ(黄ばみの物 OK)

※持っていない方は、当日布の販売もあります。

☆参加料は無料です。

どなたも気軽に体験してみてください。

ひだまり
山肌が若草色に染まり、黒沢地区にも新しい季節の息吹が聞こえてきました。この季節は田植えのシーズンで忙しい時期です。また、畑を作っておられる方も汗を流して精がでる時期ですね。どなたも、季節の変わり目には体を冷さないよう、こまめに着替えをしましょう。

公民館は桜が終わり、今では色とりどり花壇の花が、私たちの目を楽しませてくれています。今度はずつじの花が、次の出番を待って咲き出しました。

「黒沢地区は自然がいっぱい！」
五月の連休には、地方からご家族が里帰りされる方も多いかと思えます。是非、この機会に黒沢の良さ・自然をおおいに満喫して、季節の料理を召し上げて下さい。（直）

古和の里 川がたり

下古和 石川正史

第九話 ウナギのこと

ウナギは、その生態が完全に解明されていない神秘的な魚である。水からあげてもナカナカたばらないほど特化した生命力は、百年は余裕で生きるといふスッポンと比しても見劣りするものではない。

だからというわけではないが、私はウナギが好きだ。捕るのも食べるのも両方好きなんだが、最近それに加えて飼育してみたいと思うようになった。その時に備えて、まだ見ぬ私のウナギに「ウナリン」という名前まで準備しているのだ。

ウナギのすみかは、上古和のつり橋の下にあるふとん石のすきまだと知っている。ほどよい大きさのウナリンを生捕るのは朝飯前だ。私は、鰻筒ウロとぶっこみ釣りで毎年数十匹のウナギを捕るが、足の親指以下の小さいやつは、大きくなれよと一声かけて逃がしてやる。これを逃がさず持つて帰ればいいだけだ。

いつも近くの用水路に放すのだが、よたよたと不器用に泳ぐ姿をみると、オカメのような顔と相まってどうしようもなく可愛いのだ。

私の勝手な見解では、上古和の里には二種類のウナギがいる。顔で区分するとオカメ顔とウリザネ顔なんだが、両者とも愛嬌満点で、好きだ、飼いたい、と思うようになったのは、この顔をいつも眺めていたからかもしれない。

私の見解などと偉そうに言ってしまったが、ウナギの蓋蓄（うんちく）については後述するとして、私の飼育願望はグツグツとマグマのように胎動し続けていたのだが、ある日、どうしても我慢しきれなくなり、思い切ってナオミさんとアイさんをお願いしてみた。

「むかし怪物金魚を飼った水槽があったらーや。あれはまだ使えらーのう」

さりげなく切り出し、ズバツと本題に。

「あれでウナギを飼いたいんだがのう、俺が捕ってくるけえ、人差し指くらいのもちーまいやつ」

彼女らの反応にはシビれた。

「……」

「こたれずにさらにかぶせてみる。」

「……」

日を改めることにした。
ちなみに怪物金魚は、アイさんが保育園の頃、三隅フェスタで買った数匹のうちの二匹である。このヒブナがドネらい長生きして、買った時には消しゴムくらいだったのが、晩年の彼女は体長二十五cmにもなって、ジュンテンドで求めた一番でかい水槽が狭く感じられるほどだった。私は冷酷にも、甘辛く煮付けたらうまいだろうなあと心から思っていた。まさにノドグロか金目ダイのような風情があった。

さて、飼育の方はもう少し我慢するとして、ここから天然ウナギの蓋蓄を少し披露しよう。学術的なことも含むので、ダラダラと面白くないと飛ばす人もいようが、意に介さず進めたい。

生まれたての幼魚をレプトセファラスというが、ここは省略するとして、二月頃、海流ののって田ノ浦海岸にたどりつく、シラスウナギと呼ばれる稚魚から始めよう。稚魚は、しばらくの間は泥の下などに隠れて過ごし、四月になって、人間にすくいとられなかったり、ボラの餌食にならなかった悪運の強いのが川を上り始める。水温五月が遡上の最盛期で、成長しながら様々な障害を乗り越えて目的地にたどり着くと、そこに住みつく、
夜行性なので、昼間は岩陰や、穴、泥の中に潜み、夜間

活発にエサをあさる。食欲な魚だが縄張り意外と狭く、大物でも百メートルくらいのものである。

初夏から秋にかけてエサをとる量が増えて初冬に最もよく成長する。これは、越冬に備えて栄養を蓄えるためである。水温が十五度以下になると急に食欲が減退し、十度になるとほとんど食べなくなるという。

エサは、貝、小魚、昆虫、エビ、カエル、動物性なら何でも食べる。夜行性なので視力はさほどでもないが、臭覚が素晴らしい。鼻ではなくて体表に味蕾というセンサーがあって、その感度は、風呂いっぱいの水の中に落としたり一滴の酒を感じできるほどである。ちなみに、冬はエサを食わず、泥の中に潜ってほとんど出ない。半冬眠である。

こうして七八年川で生活すると成熟年齢に達する。秋になると、横腹が銀色の光沢、いわゆる婚姻色を帯びてきて、台風などの増水に乗じて河口まで下る。これを下りウナギと呼ぶが、大物は脂がのってこの世の物とは思えないほど美味である。しかし、こいつらは下り始めると食が細くなり、エサを使った漁が通用しないので、この時期の私は、抱溜（ほうりゅう）という大きな網で待ち受ける漁にウツをぬかす。「雨が三粒降れば川に行きんさる」と人に言われるほどのノボセモンである。

さて、河口に着いた下りウナギは、仲間が集合すると、フィリピン沖の産卵場（海山の麓らしい）に向かってヒタスラ泳ぐわけだが、その速度は一日三十海里という。どれくらいの速さかピンとこないが、それより海流に逆らってフィリピン沖まで行くこと自体、とてもなくドラマチック&ミステリアスである。

壮絶なウナギの生き様を思うにつけ、狭いところに閉じ込められるのは許されるのか、自由を奪う権利があるのか、じやあ捕って食べるのはどうなんだ？と心は揺れ動きながら、やっぱり飼ってみたいなあ……と思うのだった。

（平成十六年執筆）